

張ってオール持つ手に一段と力がある。

自転車がまだ珍らしいところだった。元旦も過ぎて間もなく、土浦を背にして、この仮橋を渡り鉄橋の下をくぐって距離にして僅かだったが桜川ぞいの堤防。当時土浦中学校の教師だった亡父倉之助。愛称安縁山先生が、まだ習いたての自転車でフラフラと、この僅かな堤防。それも細道だったが、ハンドル持つ手もあやしげに生憎と自転車のペダルをふんでいた。と、反対側からこれまた生憎と馬がたて髪を振ってやってくる。荷馬車だ。おればよかったものを。そこがそれ何とやらで、「なあにこれしき」とばかりにすれちがった。瞬間、左側通行。川添いだっただからたまらない。堤の傾斜をそのまま葦の生えた桜川の底を目がけてドブーン。幸い自転車は厚氷にひっかかったものの、ご自身は完全に水の底。洋服のままだったから勿論寒中水泳とゆうわけにもいかぬ。幸い泳げるので御無事に御帰還とはなったが、何とかは千里を走るとか。その翌日、登校してみると、誰が書いたか生徒の文字。黒板にでっかくチョークで、

桜川 長南とび込む水の音。

これは、今なおもって卒業生の語りぐさ。

桜川も虫掛から下流九十歩の曲がりを見せて如何にも不自然な流れを見せている。土浦を水害から救おうとの人工の意図。従って以前は素直に虫掛から亀城公園の前に流れ下って今の祇園町の兩岸を洗い、所謂川口にとつながっていた。私の通学時代は刑務所あたりは川の名残りを深い淵にとどめて浮き草が花を咲かせて、水すましや鰯が泳いでいた。祇園町の流れには、藪を積んだり米を積んだり、高瀬舟が舳を並べていたものだ。今も「桜橋」という名がその上の歴史を伝えている。現在では想像しようもない。

従って土浦は往古から洪水の町、何しろ霞ヶ浦が増水するのだから、なかなかもって水ひきが悪い。所謂、満水だ。床上浸水がいたる所に出来る。土地の高低は正直なもので、駅前には舟を出して騒いでいるのに、中城あたりは歩ける始末。それこそ亀城は亀の子のように満々たる水中に松籟をひびかせてきつ立、やぐら太鼓をうち鳴らしていたものであらう。

本来、今の国道筋あたりを通る予定の常磐線を、霞ヶ